武蔵野ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を楽しみながら学ぶ

市内に残る樹木の歴史

市内には歴史のある樹木がいくつも存在します。今回はその中でも、市や都、国が文化財として指定した樹木を中心に紹介します。

人と共に歩んできた武蔵野市の名木

かつての武蔵野台地は水利が悪く、農作物などの実りの乏しい地域でした。江戸時代に玉川上水が開通して新田開発が進むと、広大な農地ができ、五日市街道沿いには「西窪村」や「吉祥寺村」といった集落が誕生。大正12年の関東大震災を機に、さらに多くの人が移り住むようになりました。現在武蔵野市内には、市や東京都が天然記念物として指定する見事な樹木が残っています。それらの樹木には、当時江戸から移り住んだ人たちの庭先を彩っていた庭木も多く含まれています。

「地域の樹木の性質と住む人との関わり方を見ていると、土地の性質が見えてきます」と語るのは、樹木の専門家として市の文化財保護委員も務める、東京農業大学の濱野周泰教授。「計画的に市街地の造成を進めた武蔵野市は、比較的新しくつくられたまち。天然記念物となっている樹木も自然発生したものではなく、人との関わりの中から生まれ、暮らしと共に生きてきた木々ですね」。

吉祥寺に移転した大正13年当時の成蹊学園の様子。正面の建物は本館で、その手前両脇に見えるのが植栽されたばかりのケヤキ並木。（写真提供：成蹊学園史料館）

例えば、樹齢約300年と推定される「源正寺のイヌツゲ」は、江戸時代に源正寺が創建された際に植栽されたといわれています。イヌツゲは日本庭園になじみ深い樹種で、この「源正寺のイヌツゲ」も、鑑賞樹として丁寧に手入れをされてきました。「竹内家のカキの木」は、推定樹齢290年の樹勢旺盛な巨木。江戸時代の新田開発時に苗木を植栽したといわれています。

観賞用として植えられたケヤキの木

「武蔵野の自然」といえば国木田独歩が著した『武蔵野』の雑木林を思い浮かべる人もいるかもしれませんが、その書き出しにある「“武蔵野の俤（おもかげ）は今わずかに入間郡に残れり”と自分は文政年間にできた地図で見たことがある」という記述などからも分かるように、かつての武蔵野は多摩川と入間川、荒川に囲まれた長方形の台地を指しており、さらに平安時代までさかのぼれば、関東平野を含めた広大な平原を「武蔵野」と称していたようです。

市内の天然記念物に指定された樹木の中には、雑木林でよく見られるケヤキも含まれています。冬の北西風を遮るための防風林として、また、貴重な燃料として重宝されたケヤキですが、「高橋家の大ケヤキ」と「成蹊学園のケヤキ並木」は、どちらもその端正な樹形を愛でるために鑑賞樹として植えられました。「高橋家の大ケヤキ」は根元の周囲が約4・9m、屋敷林の1本として植えられました。「成蹊学園のケヤキ並木」は、成蹊学園が池袋から吉祥寺に移転した際、学園設計者の三菱地所株式会社が教職員・生徒らとともに600mにわたって植栽。武蔵野台地の特色であると同時に、「すくすくと生徒が育ってほしい」という学園の教育方針を象徴する樹木として、ケヤキが選ばれたといわれています。

武蔵野市の樹木についてお聞きしました

東京農業大学 地域環境科学部教授
濱野周泰（はまのちかやす）さん

専門は造園樹木学および造園植物学。樹木医学会理事、社叢会理事を務め、名木の保護活動にも取り組んでいる。平成16年から武蔵野市文化財保護委員。

❶井口家のサンシュユ
八幡町3-8-3

武蔵野の新田開発における井口家の功労をねぎらい、幕府から賜ったといわれる。

❷井口家の大ツバキ
八幡町3-7

井口家の屋敷裏に植えられた、こんもりとしたヤマツバキの大木。樹齢約280年。

❸源正寺のイヌツゲ
緑町1-6

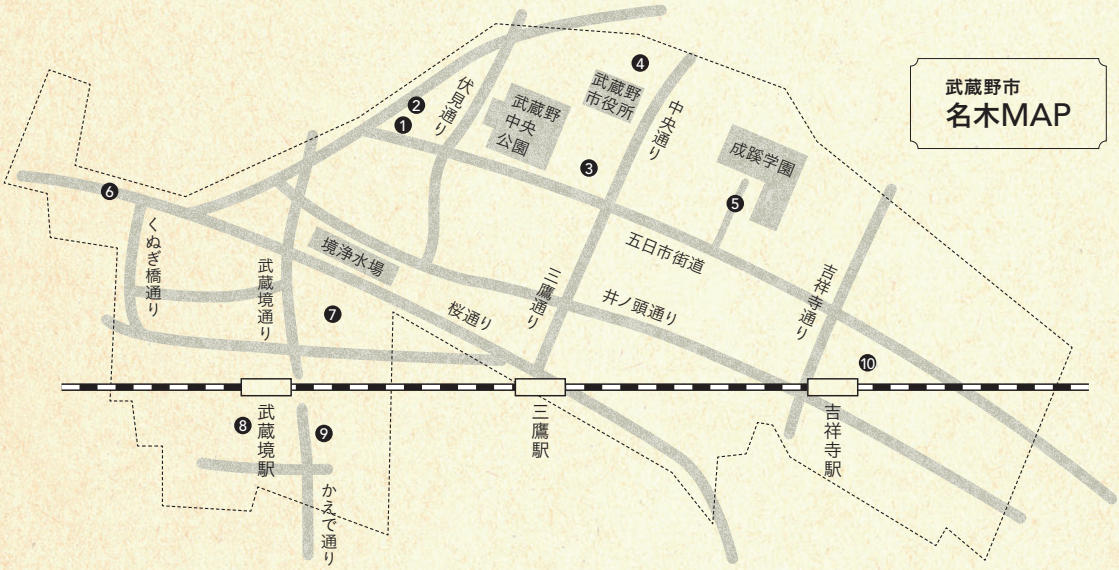
旧西窪村の源正寺境内にある古木。独立樹として植栽され、現在の高さは約3.95m。

❹ふじの実保育園のフジ
緑町3-4-3

市内随一の古木として名高い樹齢約230年のノダフジ。元は民家の庭にあったと推定される。

❺成蹊学園のケヤキ並木
吉祥寺北町3丁目

成蹊学園が吉祥寺へ移転した際に植栽。植栽時は樹齢25～30年、現在の樹齢は約120年。



❻小金井（サクラ）
小平市桜堤

江戸時代に玉川上水の両岸に植樹されたヤマザクラ。歌川広重も錦絵にした国の名勝。

❼高橋家の大ケヤキ
境3-10-26

樹齢約330年。高橋家の庭先の屋敷樹として育てられた。幹回りは約4.9m。

❽竹内家のカキの木
境南町3-11-3

新田開発当時に苗木を植栽したとされており、樹齢は約290年。今も甘い実をつける。

❾杵築大社の千本イチョウ
境南町2-10

株立状で主幹5本、支幹40数本。昔イチョウが枯死した際、支幹が成長したと考えられる。

❿吉祥寺旧本宿のケヤキ
吉祥寺本町1-35-12

東京都指定天然記念物。推定樹齢約600年。幹の内部は空洞。幹回りは約5.1m。

これからも名木たちと共に歩んでいくために

江戸時代の新田開発とともに発展してきた武蔵野市ですが、第二次世界大戦が激化する中、その姿を一変させます。現在の都立武蔵野中央公園とその周辺のエリアには、かつて中島飛行機武蔵製作所という軍需工場があり、米軍の攻撃のターゲットとなったために激しい空襲を受けて大きな被害が出ました。そのエリアにある市内随一の古木として愛されている「ふじの実保育園のフジ」は、戦火の影響から免れた貴重な樹木でもあります。

現存する貴重な木々を次世代に残すためには、どのようなことを心掛ければよいのでしょうか？「都市部の樹木は枝を自由に伸ばせず過酷な環境にあります。落ち葉の掃除などは手が掛かりますが、私たちの生活を支えてくれることに感謝していたわり、おおらかな気持ちで共生してほしいですね」と濱野教授。

都市部の自然は、暮らしに癒しをもたらす貴重な存在。夏の厳しい日差しや、冬の風雪を和らげてくれる木々とうまく暮らし、次の世代へと引き継がなければなりません。

 取材・文：藤城明子（ポルタ） 参考資料：『武蔵野歴史散歩』伊佐九三四郎（有峰書店新社）、『武蔵野界隈 むかし語り』（武蔵野市開発公社）、『武蔵野』国木田独歩（新潮社）